

『61歳で大学教授をやめて、「へき地のお医者さん」はじめました』

2024年10月14日

「東京新聞」に連載している香山リカ氏のコラム「ふわっとライフ」を楽しみに読んでいる。彼女は、立教大学教授で、精神科の専門医であったが、北海道の真ん中くらいにある「むかわ町国民健康保険穂別診療所」という所で、へき地医療をはじめた。人々がその転進に関心と興味を持つことは当然であろう。香山氏は、診療所で起こったことなどを中心にコラムを執筆している。人は皆、生きることに苦労し、涙することが多いが、彼女は、どんな事柄をも常に肯定的に捉え、生きることを喜ぶように書いている。私は、今の世の中のこと、一番関心のある諸教会のこと、そして自分自身のことなど、今までにない不安といら立ちを覚え、気の滅入ることが多い。そんな中で、香山氏の人生を大らかに肯定し、辛くても、前を向いて生きることを勧める言葉を嬉しく読んでいる。

香山氏は、今年の2月に、長い題名の『61歳で大学教授をやめて、「へき地のお医者さん」はじめました』を上梓した。彼女は、医学に関するだけでなく、時代や世相の問題にも、幅広いジャンルで執筆、発言をしている。歯に衣着せぬ言葉は論争も起こしているらしい。大学教授という言わば、恵まれた立場にしながら、また、60を過ぎてから、なぜ、へき地医療を目指したのか、そこにおける様々な苦労と喜びを綴っている。

香山氏は札幌で生まれ、小樽で育ち、高校生から東京に住まい、東京医科大学で学び、精神科医になり、多方面で活躍していた。医学生時代の二人の友人が地域医療に関わり、彼らの働きに関心を持ち、準備もしていた。熱心なファンだったデイビッド・バーンの映画から、自己愛や権威主義や白人・男性主義から解放され、自分の信じる正しいことをしている姿を観て、私だって彼に恥ずかしくない生き方をしなければならないと思った。また、「最後の審判」の時、「私はやるべきことをひとつずつ終えてここにきました」と言えるだろうかと自問した。地域医療に押し出された二つの「死」があった。一つは母親の死で、夫と共に過ごした家で、子どもの世話にならず、バタンと死にたいと言っていた。その通りの死を迎え、警察の検死に翻弄された。もう一つは、アフガニスタンで銃撃を受けた中村哲氏の死であった。中村氏とは一面識もなかったが、彼の働きには深い敬意を持っていた。銃撃死を聞いて、『私も中村さんが引き受け続けてきたような苦労をすべきだ』と強く思った。東京の大学教員と精神科非常勤医をしていることにたまらない罪悪感を覚えたのである」と述懐している。務め先を、諸外国を含め、色々検討中、むかわ町が、恐竜カムイサウルスが発掘され、博物館があり、新博物館に建て替えも計画されている。香山氏は大の恐竜ファンで、カムイサウルスの骨を見て過ごしたいと、へき地医療の穂別診療所行きを決断した。自分を「ビッグボス」と言っ、日本ハムファイターズの監督に就任した新庄剛志氏を見たいことも北海道行きを後押ししたそうで、笑ってしまった。

へき地医療の場合、精神科だけでは役に立たず、内科、外科など総合医療を担わなければならない。そのための研修が大変だったそうで、研修中の失敗談も書いている。我々患者は分からないが、致命的瑕疵ではなくとも、色々な失敗もあるらしい。また、車の運転は必須のことで、免許証取得と練習にも苦労している。町は小さく、冬は道路だけでなく、全てが凍り付く。しかし、春の息吹は大きな喜びで、町の患者たちは優しく、ストレスはないと言う。診療所は一人ではなく、主任医師がいて、土曜日には、東京の仕事にも関わり続けられる形で、文筆業も自由にできる。香山氏の拘りのない自由さと様々なことに飽くなき関心を寄せる姿勢に、へき地医療に行ける人だと感嘆した。楽しく、読んだ。